

〈エクソダス〉2011 再見！森崎東「生きてるうちが花なのよ 死んだらそれまでよ党宣言」

I.

〈エクソダス〉2011——3月27日、〈エクソダス〉の途上の渋谷望・矢部史郎さんを迎えて、この「驚天動地」を〈反転〉することを模索する小さな試みを、スタートさせた。（*1）なんとも大仰な名づけようで、気恥ずかしいかぎりだが、ひとえに渋谷・矢部さんのもたらした〈風〉にあおられてのことでもある。

スタートしてから、「この驚天動地の〈反転〉を模索する私（・たち）自身のためのブックリスト」（*2）を用意する一方、〈反転〉の模索からのそのつどの問題提起を行う「企画」と、やや長期にわたる「アクションプロジェクト」を、進行させようとしている。——その「アクションプロジェクト」については、この「通信」のP4参照。

その企画のPART 1として、今年に入って準備を進めてきている「沖縄セミナー」（2011・5——2012・3）の「プレ企画」をかねて、4月24日に、「沖縄と東北が、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！」をテーマに、小さな集まりをもった（*3）。そして、そのPART 2として、「再見！森崎東『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』」を、企画した。

「再見！森崎東『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』」——この森崎映画（*4）は、昨年、「ビデオ（という形での）上映」したことがあったのだが、上でふれた企画としてその「再見」を行うに至ったについては、ちょっとした後日談ならぬ前日談がある。

たまたま4月9日に、池上善彦・松本麻里さんが友人を訪ねて富山に来るということがあって、短い時間だが、話をする機会があった。その折りに、福島原発大爆／曝発をめぐって、「被曝装置」としての原発との関連で、かつて80年代初めの頃に、「被曝労働者」が不可避の原発の作業現場を担う「原発ジプシー」（堀江邦夫）と呼ばれていたことに話が及んだ時に、池上さんとの間で異口同音に口をついて出たのが、森崎映画のことだった。その場ではそれ以上、森崎映画のことについての言及はなかったが、そのあと、「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党」の〈旗〉のように、映画を運動させた「アイちゃんですよオ、ご飯食べたア」という〈声〉が、あらためてよみがえってきた。

II.

「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」（*5）——森崎東は、あるインタビューの中で、この作品について、「シナリオを読んで、なんと欲ばった映画であることか、あきれましたね。単純に言って、大テーマが4つ……非行の問題、原発というもの、沖縄のこと、そして、流れのヌードダンス

一の話……。どうして4つも出てきちゃうんでしょね」とたずねられて、次のように答えている。——「4つの要素に共通項はあると思う……。面倒くさいことはするな、面倒くさいことはしないのが、新しいモラルである、と。(中略)非行はですね、…おりにすることもあるし、マジメにやらないってことです。アブセンチズムなわけで、ネグル。」「原発もですね、修繕できない。素人が修繕不可能なことはヤバイと、ね。…そういうのはおりによ」と。(中略)「踊りでメンを食おうというのは、やっぱり、大きくいうとテクノロジーへの志向をあらかじめおりにわけ……」(中略)「沖縄精神てのは、なんかこう動物みたいに月が出たから浮かれて踊るといふ側面とですね…日本本土、日帝への強烈な反抗が歴史として現代までつながってきた。…たとえば、コザ暴動ですね。…」。「非常に心豊かな美的暴動で」。

またさらに、「いろんな連中がワイワイドトバタ走り回っていくつもの渦を巻き起こしていく映画ですから、ゴツ煮のイメージ」、(中略)「今度つくるのは、宴会映画にするとおっしゃいましたね」とたずね



られて、次のように答えている。「今の世の中、宴会をみんながやらなすぎる…。ぼくに言わせていただければですね。『宴会をもっとやれ!』と、ただ一言言いたい。嬉しかったのは、『オキナワの少年』を撮った新城監督が『どうぞコザ暴動のシーンを使ってください』と言ってくれたことですね。…ほとんど暴動の場というよりもカチャーシの場だった」。

一群の女・たち/男・たちの「アブセンチズム」の情動の蜂起/一つにつらなるいくつもの〈エクソダス〉——この驚天動地の2011年に、4半世紀の時の底から浮上してきた「重喜劇」(*6)！。しかし、これは、私たちのなおのがれえない深い無明がしからしむることなのか？、それとも、森崎東の「重喜劇」とも呼ばれた映画作法がえがき出した先見性の故なのか？いずれにしても、この場合においても「政治映画を上映するべきか？映画を政治的に上映すべきか？」という公準に忠実である以外にない。

III.

以下は、〈エクソダス〉2011・企画PART2についての呼びかけである。

- 映画「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」(森崎東監督作品 85年)——そこでは、この列島社会の(「原発」立地地域のような)「周辺」部で、あるいは(沖縄のような)「周辺」部から流れてきて、ほとんど生の「限界」にさらされて生きる(いわゆる「原発ジプシー」のような、あるいは、それを相手とする「娼婦」のような)者たちの闘いが、描かれる。

それは、言わず語らずのうちに互いに支え合いながら、必死に生きる者たちと、その営みから(警察とやくざとの癒着のように)グルになって、「利ザヤ」を奪う者たちとの(歴史の「余白」に遺棄されるシミのような)闘いである。——なお、「周辺」/「限界」/「利ザヤ」/「余白」、いずれも「マージン(Margin)」の多様な意味を示す日本語訳である

- 「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」——それは、そのような闘いを生きる者たち

の〈生成変化〉の、そして、言わず語らずに支え合う生き様の共同性の表現であり、その者たちの間で受け渡されていく「**アイちゃんですよォ ご飯食べたァ**」という呼びかけは、その「党」の「旗」である。

また、「**アフレリジョーネツ、ミナギルワカサ、キョードーイッチ ダンケツ、ファイ トーツ**」が、その「党」のメイン・シュプレヒコールである。

- 映画「生きているうちが花なのよ 死んだらおしまいよ党宣言」——それは、この列島社会の底辺を生きる「流民」たちの一つに連なる情動の蜂起の軌跡を追いながら、それを観る者に、生きられた軌跡が表出する「生きているうちが花なのよ死んだらおしまいよ党宣言」に対応するあなたの「党宣言」は、あなたの「旗」は何であるのかを、問うている。

改めて付け加えるまでもなく、上でふれた「流民」たちの一つに連なる情動の蜂起の軌跡は、まさにいくつもの〈エクソダス〉群(沖縄コザからの／「生徒生産」装置としての中学校からの／被曝労働装置=原発からの／やくざ支配からの／この「日本」からの〈エクソダス〉)の集合の軌跡に、他ならない。現在この時点で、「沖縄と東北、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を」という発想が、さらには、それを「日本の構成的解体」としてつかもうとすることがさげがたいのは、何よりも、この「驚天動地」が喚起する情動の〈生成変化〉がどのような表現をもつことできるか、という〈問い〉とかかわっている。

なお、「マージン」の多様な意味については、高乗權「周辺化とマイナー化 国家の追放と大衆の逃走」(*7)によっている。そのドゥルーズ／ガタリに由来する「周辺化とマイナー化」という発想は、「マイノリティとしての大衆は尺度から逃走する」ことこそが、「脱構成的趨勢」(*8)の核心であるという認識によっている。

〈註〉

1. スタートの集まりについては、「〈エクソダス〉2011 通信・1」参照
2. その前半については、「〈エクソダス〉2011・通信4」参照
3. この集まりについては、「〈エクソダス〉2011 通信2」参照
4. 「生きているうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」——上演年：1985年／監督：森崎東／制作：キノシタ映画／主演：倍賞美津子 原田芳雄 平田満 殿山泰司 泉谷しげる 梅宮辰夫
5. この映画のシナリオは、「日本の喜劇映画 2. 森崎東」(映画書房／1984年刊)に収録されている。同書には山根貞男を聞き手とする「インタビュー」も、収録されている。なお、山根貞男「日本映画が裸になるとき」(青土社／1988年)に、「宴会映画の楽しさ」という同映画評がある。
6. 森崎東の作品群が、かつて「重喜劇」と呼ばれることがあったが、だれが／いつそのように呼んだのかは、不詳。
7. 「現代思想 2000年6月」——なお、この文章については、先にふれた「ブックリスト」でとりあげた。
8. D・グレーバー「資本主義後の世界のために」(高祖岩三郎 訳・構成／以文社／2010年)から。

反原発ラウンドテーブル2011・夏

原発「事故」をえぐり 原発レジームに亀裂をうがつ そのための道具(イマジネーション)を身の丈を「直径」とする避難 / 抵抗圏から 創り出す試み

●第1回 報道論:

マスコミは原発「事故」をどのように報道しているか/していないか?
——福島原発「事故」に向き合った現場記者の取材体験から
7月10日(日) PM1:00~3:30 サンフォルテ 302 号室

●第2回 運動論:

反原発地域住民運動がのこしてくれたもの——原発をめぐる能登の攻防/「魚に頼まれて」/反・脱原発運動の現在
7月23日(土) PM6:30~9:00 サンフォルテ 306 号室

●第3回 生権力論:

原発「政治」から子どもを守れ
——食料汚染/学校給食/汚染牛の行方
8月7日(日) PM1:00~3:30 サンフォルテ 305 号室

●第4回 反原発県内キャラバン(下記参照)報告——県内 6 市をたずね歩く
聴きとり/つどい/申し入れの報告

8月28日(日) PM1:00~3:30 サンフォルテ 306 号室

反原発県内キャラバン——県内 7 市をたずね歩く

「反原発県内キャラバン」では、今年8月に、以下のように、県や県内自治体への申し入れや、リサーチ、反原発ミニ集会を予定しています。詳細については、改めてご連絡します。

- 調査する——県議会議員や上記の 10 市の市会議員、各市の教育委員会などに対して、能登原発の再稼働の是非や、学校給食の放射能汚染からの安全の問題をめぐって、アンケート調査を実施する。併せて、県や、県内大手スーパー等に対して、「食」の放射能汚染の実体をめぐる聞き取り調査も行う。
- 集う——県内の6市(氷見、小矢部、高岡、新湊、富山、魚津)で開催する「反原発ミニ集会で、上記のリサーチの結果の報告や、反・脱原発への提起、原発問題をめぐる映像の上映、フリートークを行う。
- 申し入れる——県内の7市(氷見、小矢部、高岡、新湊、富山、滑川、魚津)や各市教委などに、能登原発の再稼働の反対に向けて〈声〉をあげることや、子どもたちの「食」の安全性の確保を要請する。

主催: 反原発市民の会・富山 代表: 藤岡彰弘

〒930-0009 富山市神通町3-5-3

TEL:076-441-7843 FAX:076-444-6093